

あなたを選んでくださる

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

あなたを選んでくださる

マルコによる福音書 一三・一四—二七

沖村裕史

今ここで、イエスは、世の終わりに向けての苦しみが頂点に達する、と語られますが、そのような空前絶後の苦しみは一体、何によってもたらされるのでしょうか。一四節に「憎むべき破壊者が立つてはならない所に立つのを見たら」とあります。

これはとても大切な言葉です。私たちの世界は今、実に様々な苦しみを負っており、それは世の終わりが始まっていることの徴です。しかし、その私たちの苦しみは産みの苦しみの始まりであって、最も深い根本的な苦しみは、戦争やそのうわさ、民と民

国と国の対立、天変地異や迫害によって生じるものではありません。そうではなく、「憎むべき破壊者が立つてはならない所に立つ」ことによつてこそ、根本的な苦しみが生じるのだ、と言われます。「立つてはならない所」とは神の場所、神のみが立つことができる場所であり、この世を支配する者としての場所です。そこに、神ではない人間が立つて、神の支配を否定し、自分が神であるかのように支配しようとする時、その支配者は「憎むべき破壊者」となります。その支配者は必ずしも独裁者ということではありません。個人としての人間ですらなく、ある思想であったり、政策であったり、革新的な科学技術であったり、人々の、私たち自身の意識であったりすることもあります。そこには、この社会をより良く建設し、

改善し、人々の幸福をもたらそうという思いがあるかもしれません。しかし、いのちの主である神の支配を忘れた、すべてのいのち・存在を自分の所有物であるかのようにほしいままに扱う人間の支配による建設、改善は、かえって破壊と荒廃を生みだします。生きておられる真の神を認めない人間の支配が打ち立てられ、神の場所に人間が立つとうとするによつて、人間は幸福になるどころか、「今までもなく、今後も決してない」苦しみが生じる、と言われます。「今までもなく、今後も決してない」というのは、苦しみの大きさを比較しているのではなく、およそ人間がこの世で味わう苦しみの根本が、この「憎むべき破壊者が立つてはならない所に立つ」ことによつてもたらされるのだ、ということなのです。

今ここで、世の終わりに「憎むべき破壊者が立つてはならない所に立つ」ことによつて、苦しみが頂点に達することを語られたイエスが、その苦しみが襲ってきた時には、「逃げなさい」と勧められます。私たちははずつと、「逃げてはだめ」、「逃げたらアカン」と教えられてきました。ところが、イエスは「逃げなさい」と言われます。一五・一六節でも、家に何かを取りに戻るのとなく、一目散に逃げなさいと教えておられます。一七・一八節には、そのように急いで必死に逃げていく時に、身重の女性や乳飲み子を持つ女性は不幸だ、そのことが冬に起るなら、ますます大きな苦しみが目に見えていると語られます。にもかくにも「逃げなさい」と教えられます。それは、直前一二節の「最後まで耐え忍ぶ者は救われ

る」という教えと矛盾しているように思われるかもしれません。苦しみを耐え忍ぶとは、逃げずに踏み止まり、苦しみと戦っていくことではないのか、苦しみに背を向けて逃げろという教えと、苦しみを耐え忍べという教えは、相入れないのではないのでしょうか。

これもまた大切な言葉です。イエスは「最後まで耐え忍びなさい」と言われるその一方で、「逃げなさい」と言われます。つまり、何がなんでも忍耐し、逃げ出してはならない、逃げた者は救いの恵みから落ちるといふのではないということなのです。ここで、逃げなさいとは、自分の力で最後まで戦おうとするな、ということなのです。人生には、様々な苦しみが伴います。その歩みは、苦しみの戦いの連続であり、そこには忍耐が必要なのです。耐え忍ぶことなしに、信仰者であり続けることはできません。けれども、その私たちの忍耐が、救いをもたらすものではありません。私たちが苦しみと戦って勝利し、救いを獲得するものではありません。たとえ今、苦しみの始まりにおいて、ある程度忍耐して持ちこたえることができているとしても、その苦しみは世の終わりに「神が天地を造られた創造の初めから今までのく、今後も決してないほどの苦難が来る」のですから、その苦しみに打ち勝つことなど、私たちにできません。逃げてよい、いえ、逃げるしかありません。

では、逃げるしかない私たちの救いは、どこにあるのでしょうか。二〇節にこうあります。「主がその期間を縮めてくださるなら、だれ一人救われぬ。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである」と。苦しみに打ち勝つことはできない、逃げるしかない。このままでは誰一人救われることのない。そんな私たちのために、主なる神が苦しみの期間を縮めてくださり、その

神の愛と恵みによつて私たちは救われる、救われたのだと言われます。これは、神が苦しみをどれだけ軽くしてくださるのかということではなく、私たちの救いが私たちの努力や忍耐によつてではなく、神の愛と恵みによつてこそ与えられるのだということをお教えるのです。

そのことは、「ご自分のものとして選んだ人たちのために」という言葉にも表わされます。神が苦しみの期間を縮めてくださったのは、ご自分のものとして選んだ人々のためだった。つまり、私たちの救いは、神の選びによるのだということなのです。この「神の選び」という教えは間違つて受け取られやすいのですが、その教えが語ることは、ただ一つ、私たちは、自分の力や努力や忍耐によつて救いを獲得するのではなく、ただ神の愛と恵みによつて救われるのだ、ということなのです。ですから、自分は選ばれたのだと、人に対して誇るのとは全く間違いだし、自分のような者は選ばれていないのではと、不安になることも間違いだし、あの人には選ばれているとかいえないとか、詮索することも間違いです。私たちの救いは、「選び」という言葉で言い表すしかない、神の愛と恵みによつて与えられる、そのことが、世の終わりの、誰も耐えられないような苦しみの中で明らかになる。いえ、その神の愛と恵みとが、イエス・キリストの十字架と復活において既に与えられているのだ、と言われます。過去の恵みを数えあげるとき、滅ぶほかなかった自分が、主イエス・キリストの贖いにより救われているのだという、何よりも大きな恵みに気づかれます。そして過去だけでなく、神は、その過去と同様に、人知をはるかにこえたみ力によつて、荒野にこそ神のみ国をみたらしてくださるお方である、とこのみ言葉は私たちに告げているのです。

(二〇一五年八月三日、三位一体後第一主日礼拝)